

高岡市総合計画基本構想（素案）

はじめに	1
第1章 高岡のまちの成り立ち	2
第1節 歴史文化都市としての高岡	2
第2節 商工業都市としての高岡	4
第3節 自然都市としての高岡	4
第2章 高岡市の現状と課題	6
第1節 人口動態	6
第2節 財政構造	7
第3節 産業構造	7
第4節 公共交通と都市構造	8
第5節 地域共同体・地域団体	9
第3章 高岡市のこれから	10
第1節 高岡市の将来像	10
第2節 将来像とその実現に向けた基本的な方針	10
(1) 静かな愛着と誇りを、責任感と主体性へ	10
(2) ひらかれたまちづくり活動の推進と活動間の連携強化へ	11
(3) 市域を超えた協働推進へ	11
(4) データに基づく可視化された自治体運営へ	12
(5) 時代とともに変化する価値観の受容と相互尊重へ	12
おわりに	13

はじめに

高岡市は、歴史・文化、商工業、自然という3つの側面すべてにおいて、奥行きある多層的な魅力に溢れたまちです。1,200年以上前にこの地の自然に根ざして詠まれた歌が今なお息づき、江戸時代の高岡城跡が良好な状態で保全されるとともに、高岡銅器などの伝統産業からアルミニウム産業などの近代工業に至るまでが興隆・共存し、雨晴海岸からの景観が今日も多くのお客を魅了する—これほど多彩な魅力に恵まれたまちは、日本全国はおろか世界を見渡しても、決して多くはないことでしょう。

高岡市の真の魅力は、「〇〇のまち」といったような単純な言葉では言い表し切れない、複雑で、多層的で、奥深い多面性にこそ見出せます。しかしながら、高岡市民は、このまちがこれほどまでに恵まれていることに、あまり自覚的でなかったのかもしれませんが。というのも、このような真価は、市民がまちの過去・現在・未来について深く考え、理解した上で、自ら主体的に関わっていく中で、ようやくその実感を得られるものだからです。逆に言えば、ここにはまだ、高岡市、そして高岡市民の可能性が眠っているとも考えられます。

この基本構想は、今後10年間の高岡市の将来像とその実現に向けた基本的な方針を示すものですが、未来を描くためには、過去が現在とどのように繋がっているのか、そして、現在が未来へのどのような分岐点にあるのかを、丁寧に確認していく必要があります。したがって、この基本構想は以下の構成となっています。まず第1章では、高岡のまちの成り立ちを、特に上で述べた高岡市の3つの側面から確認し、過去と現在を接続します。続く第2章では、高岡市の現状と課題を概観します。最後の第3章では、第1章と第2章を踏まえて、これからの高岡市、そして、高岡市民のあり方を展望します。

人工知能（AI）をはじめとする技術革新の波を受けて、これからの社会は、短時間で表面的に理解しやすい物事にますます誘引されていくことでしょう。そのような未来においてこそ、まずは高岡市民が、一見すると分かりにくく、複雑に絡み合いながら重なり合っている、それゆえに奥深いこのまちの真価を、自ら再考・再発見して継承していくことが求められます。ここに、高岡市の未来をともに考え、ともに実現していくための指針として、この基本構想を定めます。

第1章 高岡のまちの成り立ち¹

高岡市は周辺町村との合併を重ねながら現在のかたちをつくってきました。1942年（昭和17年）に良港を有する伏木町、戦後には周辺村部、1966年（昭和41年）には戸出・中田両町、2005年（平成17年）には福岡町とそれぞれ合併し、現在の市域に至ります。

しかしながら、この地ではこれらの合併以前から、時代のうねりの中で、人々が生活を営み、歴史と文化を紡ぎ、商工業を興し、自然と共生してきました。現在の高岡市もこういった蓄積の上に成り立っているのです。

この章では、高岡市の奥行きある魅力を、歴史文化都市・商工業都市・自然都市という3つの側面から確認していきます。これらの3つの奥行きある多層的な魅力の集積こそが高岡のまちの真価であるということに、じっくり想いを馳せてみましょう。

第1節 歴史文化都市としての高岡

「高岡市」という行政単位が成立したのは1889年（明治22年）ですが、この地にはその遙か以前から人々が暮らしていました。市域内では旧石器時代の石器や縄文・弥生・古墳の各時代での生活の痕跡が発見されています。

7世紀末から8世紀初頭にかけて律令制度が整えられる中で、現在の富山県にあたる地域は越中国となります。746年（天平18年）には『万葉集』の編纂において重要な役割を果たしたとされる大伴家持が国守（律令制における地方行政の責任者）として現在の伏木に赴任し、この地を去る751年（天平勝宝3年）までに数多くの歌を遺していきました。『万葉集』には大伴家持が詠んだ歌が473首収められていますが、うち、越中赴任時に詠まれた223首が家持の歌日記の形で『万葉集』17-19巻に収められており、家持以外により詠まれた越中に関わりのある歌約110首と併せて「越中万葉」と呼ばれています。日本最古の歌集である『万葉集』に現在の高岡市にあたる地域とゆかりある歌がこれほど多く収められていることは、高岡市が「万葉のふるさと」と呼ばれる所以となっており、市内各地の歌碑がその精神性を現在まで継承しています。

¹ 《参考文献》「高岡市市制100周年記念 たかおか—歴史との出会い—」（高岡市、1991）、「Made in TAKAOKA メイド・イン・タカオカ 伝統工芸と近代産業が織りなす富山県高岡市」（関満博、2022）

越中の地は各時代の権勢のもとで時を重ねていき、豊臣秀吉が天下統一を推し進めていた16世紀末時点では、その大部分が前田家の領地となっていました。加賀、能登、越中の3国にわたって120万石もの広大な領地を治めていた加賀前田家の2代当主・前田利長は、1609年（慶長14年）、富山城の焼失や政情の変化等を背景に高岡城を築き、これが高岡の開町とされています。この時期は、多くの町人（商人や鋳物師等の職人）が移住するとともに、同年にはじめて「高おか」という地名が史料で用いられるなど、名実ともに「高岡」の生誕であると言えるでしょう。高岡城は、この開町から6年後の1615年（慶長20年）に徳川幕府による一国一城令（一つの国(藩)につき城は一つまでとする規制）を受けて、加賀藩によって廃城となりますが、以降も加賀前田家は高岡の商業都市としての発展に尽力しました。

加賀前田家は現在の高岡市にまで続く文化と産業を遺しました。1613年（慶長18年）には現在の国宝・瑞龍寺の前身である高岡法円寺を建立し、また、同じく後に国宝となる勝興寺の整備も行います。高岡市民が愛する高岡御車山祭も、元々は加賀前田家初代当主・前田利家が豊臣秀吉から拝領したとされる御所車（牛車）を、前田利長が高岡の開町にあたって町民に与えたことが起源と伝承されています。

2015年（平成27年）には、上記の高岡城跡・瑞龍寺・勝興寺・高岡御車山祭を含む「加賀前田家ゆかりの町民文化が花咲くまち高岡一人、技、心一」が文化庁によって日本遺産に認定されるとともに、2016年（平成28年）には高岡御車山祭が日本の33の祭から成る「山・鉾・屋台行事」の1つとしてユネスコ無形文化遺産に認定されました。また、利長による高岡開町を契機にこの地に根付いたとされる高岡の鋳物（銅器）や漆器は、その美術的価値が現在まで高く評価されており、これまでに高岡市民から3人の重要無形文化財保持者（いわゆる「人間国宝」）を輩出してきました。高岡市は、万葉のふるさととして、また、加賀前田家ゆかりの町民文化が色濃く残り、大切に受け継がれてきたまちとして、日本全国ひいては世界においても、極めて高い評価を受けてきた歴史文化都市なのです。

第2節 商工業都市としての高岡

江戸時代に加賀前田家のもとで商人と職人のまちとして発展した高岡のまちは、明治維新を経て、1889年（明治22年）に全国最初の31市のひとつとなります。高岡市は、名実ともに全国有数の近代都市としてその歩みを始めたのです。

このような近代都市としての成立の背景には、第1節で述べた歴史・文化の蓄積がありました。江戸期から明治期にかけて、加賀前田家の時代から盛んだった問屋業（主に米や綿・木綿染物）をもとに、高岡は多くの物資が集散する商業都市として、「加賀藩の台所」、「商都」と呼ばれるまでに発展していきます。また、鋳物の伝統を土壌とする金属加工技術は、銅製の仏具や日用品、鉄製のニシン釜、その他の建築金物や産業製品といった産品にも応用されていきます。

20世紀初頭にかけて進んだ幹線交通網の整備や、貿易港としての伏木港の整備といった交通網の発達は、高岡市の工業製品を国内市場へと送り出す重要な基盤となりました。また、戦後の高度経済成長期においても、歴史的に栄えてきた鋳物産業や金属加工技術、商業の要衝としての機能を土台として、アルミ製品や機械部品といった近代工業が展開されていきます。

このように、高岡市は、歴史と文化の中で形成された商工業を土壌として、交通網の成熟と相補的に、近代都市として発展してきました。高岡市は、時代のうねりの中で日本の主要都市として成立し、伝統産業と近代工業がともに発達し共存してきた、稀有な商工業都市でもあるのです。

第3節 自然都市としての高岡

高岡市の歴史文化都市と商工業都市としての側面は、人為的な営みによってのみ成立してきたものではありません。高岡市は、山・海・河川に代表される豊かな自然のもとで成立した自然都市としての性格も併せ持っています。

市街地から程近い山と海は、大伴家持の時代に二上山や雨晴海岸にゆかりある歌が詠まれたことにも象徴されるように、古くから人々の生活や信仰と結びついてきました。歴史文化都市としての高岡の源流には、これらの身近で豊かな自然があったのです。

この地の山々に降り積もる雪は雪解け水となって河川を通じて平野部にもたらされ、治水・利水に向けた先人らの献身もあって、生活や産業を支える重要な水資源となってきました。豊富な水資源はこのまちを米の一大産地として育み、今日においても稲作が盛んに行われています。庄

川・小矢部川が流れ込む富山湾は、海底の構造や能登半島に沿った海流から天然の生簀とも呼ばれ、世界的にも多種多様な海産物の宝庫としてこのまちに海の幸をもたらしてきました。伏木港は、第2節でも触れたように、高岡の内陸部と海を結ぶ日本海側を代表する港として、物流や人の往来を支えてきました。平野部を囲む庄川や小矢部川といった河川は農業を支えるのみならず、鋳物や金属加工といった高岡の主要産業の製造工程に欠かせない要素でもありました。山と海と平野部を繋ぐ豊かな水資源が、このまちの産業と人々の生活を潤してきたのです。

このように高岡市の自然は、時代を超えて歴史・文化、生活、産業の源であり続けてきました。歴史文化都市・商工業都市としての高岡のまちは、豊かな自然の上に重層的に築かれてきたものであり、この意味において、高岡市は自然都市でもあるのです。

ここまで見てきたように、歴史・文化、商工業、自然の3つの奥行きある魅力が連関しながら重層的にまちをつくってきたことが、高岡のまちの真価であると言えるでしょう。

第2章 高岡市の現状と課題

この章では、現在の高岡市がどのような状況にあるのかを、主に過去 10 年程度の変化を振り返りながら概観していきます。すべての課題を網羅することが目的ではなく、高岡市の^{おおよそ}大凡の現在地が示されることで、この章に続く第3章において高岡市のこれからを展望する下地とします。

第1節 人口動態

高岡市の人口は長期にわたり減少局面が続いています。2015 年（平成 27 年）の総人口は 172,125 人²でしたが、2025 年（令和 7 年）時点では 158,693 人³であり、この 10 年間で 13,432 人、約 7.8%の減少が見られます。一方で、65 歳以上人口の割合は 2015 年（平成 27 年）の約 32.1%から 2025 年（令和 7 年）には約 33.3%へと上昇しており、全国平均を上回る水準で推移しています。高岡市は全国的に見ても高齢化が進んでいるまちであるというのが現実です。

高齢者の人数が 2020 年（令和 2 年）頃から横ばい傾向にあることを踏まえると、近年の高岡市の高齢化は、高齢者の増加よりも若年層の減少によって進行している構造にあると言えます。2015 年（平成 27 年）から 2025 年（令和 7 年）にかけて、20 代および 30 代の市内人口は 32,532 人⁴から 25,426 人⁵に減少しており、その減少率は約 21.8%に達しています。これは上で述べた総人口の減少率（約 7.8%）を大きく上回る水準です。

このような若年層の減少は、各産業の働き手不足、地域活動の担い手の減少、財政面での公共サービスの持続可能性の低下、さらには伝統工芸における技能の継承者不足といったさまざまな課題につながっています。高齢者割合が全国平均を上回っていることを加味すれば、今後これらの課題が全国平均よりも早期かつ複合的に深刻化していくことが見込まれ、人口減少や高齢化への構造的な対応と各課題への個別対応がともに急務な状況です。

² 《出典》「令和 2 年国勢調査結果」（総務省統計局）

³ 《出典》「富山県人口移動調査結果（推計人口）令和 7 年 10 月 1 日現在」（富山県）

⁴ 《出典》「令和 2 年国勢調査結果」（総務省統計局）

⁵ 《出典》「富山県人口移動調査結果（推計人口）令和 7 年 10 月 1 日現在」（富山県）

第2節 財政構造

高岡市の財政構造は、第1節で触れた人口減少と高齢化の進行を背景に、支出の重点が社会保障分野に置かれています。2024年度（令和6年度）の一般会計歳出総額約772億円のうち、社会保障関連支出にあたる民生費は約280億円で、総額の約34%に達しています。高岡市において社会保障関連支出が財政全体に占める比重の大きさがうかがえます。

市民1人に対する一般会計歳出額は、2015年（平成27年）時点の約40万円から2025年（令和7年）時点で約49万円へと約30%増加しており、行政サービス維持のための単位人口当たりコストの上昇が見られます。もちろん、これらの歳出は市民の税金や社会保険料等によって支えられているものです。

高岡市が保有する公共施設は、2025年（令和7年）時点で312施設にのぼります。これらの多くは高度経済成長期とその後の10年間に整備されたものであるためすでに老朽化が進んでおり、維持していく場合は大規模改修なども必要になるとともに、解体するにも費用が生じます。個別の事案を短期的な視点で安直に決定することなく、長期的かつ包括的な都市経営の視点から慎重に判断していくことが求められます。

人口減少と高齢化の進行を踏まえると、将来的な税収の大幅増加も見込めない中では、社会保障分野を中心とする歳出の増加傾向は一層深刻化していくことが予見されます。市の収入が減る一方で必要な支出が増え続ける未来においては、公共施設の再編や行政サービスの合理化・効率化はもちろん、今後、従来は行政が担ってきた様々な役割や機能を再定義し、これを行政とは別の多様な主体が引き受け、さまざまに協働していく必要性が一層増していくことでしょう。

第3節 産業構造

経済センサスによると、高岡市内の従業者数は2016年（平成28年）の約80,700人⁶から2021年（令和3年）には約82,000人⁷へと約1.6%増加しており、一定の雇用は維持されているものの、人口減少や高齢化に伴う人材不足が深刻化しています。一方で、デジタル化や事業承継の推進、サプライチェーンの合理化などに取り組むことで、労働力不足の中にあっても生産性を向上させていく余地が十分にあると考えます。

⁶ <出典> 「平成28年経済センサス・活動調査結果」（総務省・経済産業省）

⁷ <出典> 「令和3年経済センサス・活動調査結果」（総務省・経済産業省）

事業所数は減少傾向が続いています。市内事業所数は2016年（平成28年）時点の約9,250事業所⁸から2021年（令和3年）には約8,700事業所⁹へと約6%の減少を見えています。特に小規模事業所の減少が顕著であり、地域経済の裾野が縮小している状況がうかがえます。大規模チェーン店や都市圏に本社を置く大企業等が高岡市内への参入を重ねる一方で、高岡駅前を中心市街地では営業店舗数の減少と店舗の住居化が進行しています。

2024年（令和6年）の高岡市の観光入込客数は約313万人となり、新型コロナウイルス感染症の流行期から回復基調を見せていますが、宿泊客数は約30万人に留まっています。観光客数は一定規模を維持しているものの、短時間滞在の観光客が多く、観光による消費が地域経済に十分に波及していない構造が見て取れます。高岡のまちの真価である奥行きある多層的な魅力は享受に時間を要するであろうところ、これらの打ち出し方次第で改善できる余地が残されているとも考えられるでしょう。

このような中で、鋳物をはじめとする高岡市の地場産業には全国ひいては世界から注目を集める独創的な企業・産品も増えてきています。また、高等教育機関によるリサイクルアルミの研究開発・社会実装の取組や、市内事業所による資源循環・循環経済に向けた取組など、独自の新たな価値創造の動きも見られます。市場開拓に成功したこれらの事例をモデルケースにしつつ、国内外の市場ニーズとの乖離を埋める工夫や、起業や事業承継の促進、市外の人材に対する事業拠点・生活拠点としての訴求、これらと連関した文化振興や観光消費拡張に向けた包括的な取組など、市の産業に新たな風を吹き込む施策が求められています。

第4節 公共交通と都市構造

高岡市では、中心市街地のみならず、それぞれの歴史や特性を有する複数の市街地が形成されています。各市街地の特性に応じた都市機能や居住機能を緩やかに維持・誘導するため、道路や公園といった都市施設などの既存ストックを最大限に活用することが必要です。

また、高齢者が市人口の約3分の1を占める現状を踏まえれば、中心市街地と各市街地を繋ぐ公共交通は依然として不可欠な社会基盤です。さらには、人口減少と高齢化の同時進行のもとで

⁸ <出典> 「平成28年経済センサス・活動調査結果」（総務省・経済産業省）

⁹ <出典> 「令和3年経済センサス・活動調査結果」（総務省・経済産業省）

持続可能な都市構造をつくる上で、公共交通はまちのあり方を大きく左右する極めて重要な要素です。

しかしながら、公共交通の利用者数は、第1節でも触れた若年層の減少に伴う通勤・通学時の需要減少等を受けて、依然として厳しい状況にあります。経営面から見ると、利用者数が減少し続けていく状況下で路線や本数を従来どおり維持し続けていくことは現実的ではなく、他方で、安直な縮小は市民生活の利便性低下や中心市街地の空洞化を一層加速させるおそれもあり、慎重な検討が必要です。

したがって、地域の活力低下を生じさせないように、地域生活拠点を中心とした都市機能の集約・機能分化や、総合的な都市開発と一体となった交通体系の再構築など、機能性・安全性・利便性の高い持続可能な都市構造の検討と構築が求められています。

第5節 地域共同体・地域団体

高岡市民の自治会への加入率は、2012年（平成24年）時点の約87%から2024年（令和6年）には約77%と約10ポイント低下しています。また、若者世代の地域活動への参加減少などにより、これまで実施してきた活動の縮小や休止を余儀なくされた地域も少なくありません。

今後も人口減少と高齢化が進んでいく高岡市においては、従来は行政が担ってきた様々な役割や機能を再定義し、行政ではない多様な主体が引き受けて協働していく必要があります。この要となる存在が、自治会・町内会やPTAなど各地域に深く根差した共同体や団体です。これらは、行政、地域、関係機関が連携し、全ての人が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられる地域共生社会の実現のためにも、極めて大きな役割を担っています。これからの高岡市の基盤の一つである地域共同体・地域団体の弱体化や希薄化は、特に長期的な視点から考えた際には、極めて深刻な問題です。

2024年（令和6年）1月に発生した令和6年能登半島地震では、高岡市内においても、避難所運営や情報共有の場面で自治会等の地域団体が重要な役割を果たしました。一方で、高齢化や人手不足により対応力に地域差が生じた現実もあります。地域共同体・地域団体は、各地域の歴史や伝統を継承していく役割だけでなく、防災や相互扶助の観点からもその重要性は変わることはないことから、組織や活動内容の維持のみならず、その再構築も重要な課題となっています。

第3章 高岡市のこれから

第1章では、高岡市が歴史・文化、商工業、自然という3つの側面すべてにおいて奥行きある魅力に溢れたまちであることを改めて確認しました。続く第2章では、そのような高岡市がさまざまな課題に直面している現状を概観しました。この第3章では、ここまでの内容を踏まえつつ、高岡市の将来像とその実現に向けた基本的な方針を展望していきます。

第1節 高岡市の将来像

高岡のまちの真価は、歴史文化都市、商工業都市、自然都市という3つの奥行きある多層的な魅力を有する点にあります。これからの高岡市は、高岡市に住んでいる人が「高岡市に住んでよかった」と実感できるまち、また、高岡に住んでいない方にも「高岡に住んでみたい」と感じてもらえるまち、『住みたいまち 高岡』を将来像として、この実現に向けた取組を進めていきます。また、この取組にあたっては、市民一人ひとりが有するまちへの愛着と誇りを責任感と主体性へと昇華させるとともに、高岡のまちの真価を高岡市の内外に伝え、守り、継承していきます。

第2節 将来像とその実現に向けた基本的な方針

(1) 静かな愛着と誇りを、責任感と主体性へ

高岡市民の多くは、富山県西部の中核的都市であるこのまちに対して、普段は公言せずとも、静かな愛着と誇りを抱いています。たとえば、人口規模や経済規模では敵わない近隣の他都市に対しても、強い負い目を感じることなく、或いは、不要な対抗心を燃やすこともなく、いわば悠然と構えているところがあるのではないのでしょうか。

しかしながら、まちに対する愛着や誇りを抱かせてくれているのは、このまちをつくり、守り、継承してきた先人たちの献身の蓄積にほかなりません。言い換えれば、現在を生きる高岡市民が、第1章で触れたこのまちの真価を理解することなく軽視したり、第2章で触れたこのまちの現状と課題と向き合わなかったりすれば、愛すべき・誇るべきこのまちを存続させることは不可能です。そして、これは未来への警鐘ではなく、すでに到来している現実にはほかなりません。愛着と誇りのもとで安住しては、その愛着と誇りの対象たる高岡のまち自体が弱体化の一途を辿っていくばかりです。このような課題意識のもと、行政や地域企業等の各種法人や地域団体・有志

団体等には、高岡市民が抱くまちへの静かな愛着と誇りを責任感と主体性へと昇華させていく取組が求められます。

これからの高岡市は、全国の多くの基礎自治体と同様に、これまで行政が担ってきた機能や役割を市民主体の活動で補完していく構造転換が求められていくという揺るぎない事実を市民と広く共有し、10年後、ひいてはそれ以降の高岡市をも支える未来志向の市民性を形成していきます。

(2) ひらかれたまちづくり活動の推進と活動間の連携強化へ

これまでも、「まちづくり」「地方創生」「地域振興」といった言葉のもと、さまざまな活動が展開されてきました。しかしながら、これらの活動は、担ってきた一部の人たちとそれ以外の大半の高岡市民のあいだに、ある種の心理的な溝が生じてきたことは否めません。また、活動同士の横の連携にも、強化していく余地が多分に残されています。

これからの高岡市は、これまでの経緯を尊重しつつも、より多くの市民がこれらの活動に可能な限り気軽に参加できる環境を整えるとともに、市内の活動同士の連携や他の全国各地の団体や活動との協働を推進していきます。

(3) 市域を超えた協働推進へ

高齢者割合が増大しながら就労者・若年層・事業所が減少している高岡市では、まちづくりに限らず、産業から福祉に至るまでのあらゆる経済活動・社会活動においても、世代・業界・居住地を超えた積極的な協働が不可欠です。なお、経済活動・社会活動におけるこのような協働には、市域を超えた連携や人材招致も含まれます。

これからの高岡市は、市外在住の専門人材の積極登用や、これと関連した第二の事業拠点・生活拠点としての訴求、新たな客層や文化圏を対象とした新規事業開拓や起業など、従来の人的資源だけでは突破できなかった壁を超えていくための取組を推進していきます。

(4) データに基づく可視化された自治体運営へ

人口が増加し続け、経済が発展し続けていた時代においては、いわば全方位的にさまざまな取組や支援が可能でした。しかしながら、そのような時代は数十年前に過ぎ去っています。高岡市はすでに、全国の多くの基礎自治体と同様に、優先度付けと取捨選択を重ねていかねばならない、極めて厳しい局面に突入しています。

これからの高岡市は、実際の優先度付けや取捨選択において、これまでの人間関係や感情論に過度に左右されることなく、意識的かつ積極的にデータを活用することで、長期的視点から合理的かつ効率的な政策の立案と実行に注力していきます。また、これらの過程で、現状把握や意思決定の透明化を徹底していきます。

(5) 時代とともに変化する価値観の受容と相互尊重へ

人口動態の変化、生成 AI の発展・普及、グローバル化の進行といった時流のもとで、新たな価値観の受容、旧来の伝統的な価値観との融和や相互尊重が求められていきます。時代が刻々と変化していく中で、行政も、市民も、時代に応じて変化していく必要があります。このまちの真価—歴史文化都市、商工業都市、自然都市としての奥深い重層的な魅力—を大切にしながら、新たな価値観の受容を促進するとともに、新旧の価値観の相互尊重を推進していかなければなりません。

これからの高岡市は、世代や居住地域の差はもちろん、社会的・経済的背景の違いや組織の壁をも超えて、高岡市の新しい魅力や価値の創出に繋げていく取組を推進していきます。

おわりに

審議会での議論を踏まえて追記予定